

たそがれ時の魔法

高田由紀子



一

小六になって初めての委員会活動の日、図書室へ行くと司書の真紀先生がほほえみかけてくれた。

「葉月さん、ひさしぶりだね。図書委員になってくれたんだ。よろしくね」

五年生の途中まで図書室によく来ていたわたしは、クラスメイトや担任の先生より真紀先生の笑顔を見るとほっとした。

端の席に座るとすぐに、坊主頭の男の子と、背が高く大人っぽい雰囲気の子が入ってきた。

えっ、透也くん……？

胸がドキンとはねた。一度もクラスメイトになったことはないけど、毎年、運動会のリレーではアンカーで活躍していて、同じ学年の中で目立っている藤沢透也くん、わたしはひそかにあこがれていた。

まさか図書委員会でいっしょになれるなんて。

「透也、あれやってよ、あれ」
坊主頭の子に言われ、透也くんはペンケースから青い鉛筆をとりだすと、指で回しはじめた。

うわ……すごい。

ただ一回転させるだけでも難しそうなのに、長い指と指の間をぬうように鉛筆をからませたり、手の甲で回したりしている。

目をはなせずにいると、透也くんがふいにこつちを向いた。さらりとした前髪からのぞく切れ長の目が、わたしの目と合った。ドキッとした瞬間、透也くんが手をすべらせ、鉛筆がわたしの足元に転がってきた。

わたしがあわてて鉛筆を拾うと、透也くんが目の前に来た。

こんなに近づくなんて、初めてだ。全身が心臓になったみたいにドキドキする。

青い鉛筆を、差しだされた大きな手にわたす。

「ありがとう」

透也くんが、ぺこつと頭を下げた。

「う、ううん」

わっ……初めてしゃべれた！

委員会の時間が始まって、透也くんに視線が向いてしまう。窓から入る午後の日差しで、広い背中が明るく照らされる。委員会の活動中に、またしゃべるチャンスがあるかもしれない。そう思うと、体の温度がどんどん上がっていく気がする。委員長も副委員長も、立候補する人がいなくてジャンケンで決まり、続けてどんな活動をしたのかを話し合うことになった。

委員長になった岸本さんがはずかしそうに呼びかけても、だれも手を上げない。指名しても、「えー、思いつかない」とか「わかりません」という返事が続く。

さっと手を上げて、「図書委員がおすすめる本のポスターを作りたいです」と、はっきり意見を言うわたしの姿を想像する。

以前、そういうポスターがはられているのを見て、わたしも作ってみたいとひそかに思っていたのだ。

でも、現実のわたしは、ひざの上に置いた手に力を入れただけ。